

三重大学人文学部外部評価総評

中日新聞三重総局長・土岐正紀

当日の質疑応答でもふれたことですが、改めてまとめると、以下の2点になるかと思います。一つは活字表現についてもっと工夫ができるのではないか、もう一つは新聞を利用することを含めた情報発信の多元化です。

活字文化に関しては、新聞業界はもちろん出版業界も昨今の若者の活字離れによって深刻な経営不振にあえいでおります。その中で、どうしたら売れるか、若者に読んでもらえるか、日々工夫を重ねていますが、なかなか手応えがつかめないというのが実感です。そうした中で、三重大学が出している出版物をみると、悪い意味で十年一日という印象を持たざるをえませんでした。

当日は一例として「TRIO」について、市販の雑誌ではごく当たり前の編集手法である「リード」をつけることで、読者を引きつけることができることを指摘させていただきました。こうした手法はさほど専門性の高いものではなく、諸々の冊子編集に携わっているプロダクションや広告代理店などで指導を受ければ、大学職員でもノウハウを身につけられるでしょう。

また研究紀要などの学術論文については、あえて難解な文章を駆使しているように思えたのは私だけでしょうか。これでは学生には理解できそうにない。それを学ぶのが大学生だというもの確かですが、伝わらなければ意味がない。もう少し平易な文体にしたり、比喩を用いたりしてもいいのにと感じました。執筆される教授のみなさんにも意識改革が必要かと思えます。

二つ目に情報発信の多元化と書かせていただきました。大学の研究成果をどのように内と外へ発信していけばいいのか。ネット社会の進展という事態に対応して、新たな方策を講じなければいけない。今回はそうした分野での説明をいただけていないので、勝手な思いこみで意見を言わせていただくと、将来的にはネット上で研究論文を公開し、地域住民の利用できるデータベースを構築することも可能ではないでしょうか。大学のホームページも拝見しましたが、もっともっと進化してほしいと思いました。

情報発信はどこへ？と問われて思いつくのは、従来からある印刷物とこのところ進化が著しいWEBの二つです。しかし、実はもっともっと手応えのある発信方法があることに気づいていただきたい。それは新聞記事です。広くこの地域の人に知ってほしい情報であれば、新聞に載せるのが一番です。電波やネットはまだまだそれに代わるまでには至っていません。そのためには“お抱え記者”を作ってください。いちいち記者会見を開かなくても、気心の知れた新聞記者がいれば、彼あるいは彼女にそっと「こんなネタがあるんだけど…」と囁けばいいのです。

新聞記者というのは、大好物のニュースを与えられると反応するように慣らされていて、ニュース価値が高ければ高いほど迅速に動きます。「特ダネ」という言葉にも敏感で、記者会見や一斉発表だと記事の扱いも小さくなることもあります。研究者と新聞記者の間には人と人の関係があつてこそ、もっとも効果的な情報発信ができる一ネット社会にあつて忘れてしまいそうですが、実はそんな人と人の営みが一番大事で確実な発信方法なのだと、私は確信しています。